

MfG_J_Person_in_Nagaoka_Horiguchi_Daigaku

T-12-4_堀口大學と長岡、長岡高校第二校歌の歌詞改訂、ほか

1. 最晩年、望郷の詩～長岡への想い
堀口大學「そして今」という 最晩年、望郷の詩
2. 雪の詩
「長岡は僕のふるさと」、ほか軸装の詩
いずれも、雪国の本当の辛さを歌ってくれていると思います。
3. 堀口大學の、詩らしからぬ詩、数題
 - (1) 詩・現代史～平和への想い
厳しいことばです。
 - (2) 詩・新春 人間に ～ 原発への警鐘
～ 皆が原発新時代に浮かれていた時に指摘しています。
個人的な話も記しました。
4. 長岡高校 第二校歌（旧制中学）の改定の話
 - (1) 概要の紹介記事
 - (2) もとの長岡高校 第二校歌
 - (3) 現在の歌詞
 - (4) 大學のことば
 - 1) 堀口大學 長岡高校講話（1957）
 - 2) 母校百年の石碑の碑文（1972）
 - (5) 時代背景
5. 参考 長岡市阪之上小学校、東中学校の校歌
6. 佐藤春夫との友情の逸話の数々

終生の友、佐藤春夫
旧制中学以来の友、松岡譲

堀口大學「そして今」という 最晩年、望郷の詩

そして今、こころに生きる
ふる里の越は北国……。

北国の弥生は四月、そして今
四月になって、梅桜桃李
あとさきのけじめもなしに
時を得て、咲きかおり……。

そして今、遠山まみに霞たち
蒲原の広野の果ての国つ神
弥彦山、むらさき裾濃
神さびまして鎮もれば……

そして今、信濃川
雪解水集めて百里
嵩まさり
西ひがし岸べをひたし
滔々と濁水はこぶ
逆巻いて

そして今、こころに生きる
ふる里の越の四月は……。

堀口大學 雪の詩

いずれも、雪国の本当の辛さを歌ってくれていると思います。

雪の詩

「長岡は僕のふるさと」

なかなかしぶとい寒さです
めいわく至極な大雪の
積もるに任す
なさけなさ!

昭和38年1月 未発表

軸装

越による雪の深さか
越びとの哀れの深さ

作成年 不詳

現代史 昭和32刊 堀口大學

開戦に陛下は反対あそばした
それでも戦は始まった
月ごとの八日 八日に集まって
日の丸立てて読みあげた
あの大詔は嘘だった

開戦に陛下は反対あそばした
それでも戦は始まった
若者は銃を担って出征って行った（でていった）
しこのみたてと気負い立ち
月ごとの八日 八日に集まって
日の丸立てて読みあげた
大詔のままに死んでった

大べら棒のとんちきの
将軍どもがでちあげた
大嘘つきのみことのり
御名御璽とは名ばかりの
あの開戦のみことのり

軍国日本三軍の
絶対無二の大元帥
陛下は反戦主義だった
千万人が傷ついた
百万人が帰らない
嘘のようだが本当です

「長岡文芸」に掲載前にされる前に廃刊となったため、
未掲載原稿となった（長岡市立図書館）

長岡市内・長興寺の山本家のお墓の東側、堀口家のお墓の脇に、二段の掲示板が建てられている。下の掲示板が「新春 人間に」。

この詩は、1970年昭和45年に書かれた詩で、翌年正月、福島第一原子力発電所が稼働した年(1971年3月に1号機)の産経新聞の1月1日号の特別版用に書かれた詩とのこと。

「新春 人間に」

分かち合え
譲り合え
そして武器を捨てよ
人間よ

君は原子炉に
太陽を飼いならした
君は見た 月の裏側
表面には降り立った
石までも持って帰った

君は科学の手で
神を殺すことが出来た
おかげで君が頼れるのは
君以外になくなった

君はいま立っている
二〇〇万年の進化の先端
宇宙の断崖に
君はいま立っている
存亡の岐れ目に

原爆をふところに
滅亡の怖れにわななきながら
信じられない自分自身に
おそれわななきながら...

人間よ
分かち合え
譲り合え
そして武器を捨てよ

いまがその決意の時だ

堀口大學

大學の「新春 人間に」の詩について、個人的な話を申しますと、社会人として、技術者人生の最初の会社での仕事が、原子力発電所の「緊急炉心冷却系配管」という、地震の際にも、原子炉の炉心溶融を絶対に起こさないという、最後の砦である設備の耐震設計に関する仕事でした。仕事を通じて、原発の耐震設計の思想、厳しさを知り、何重にも施された防御策を知っておりましたので、原発は絶対大丈夫なものと言う考えでした。おりました。万一大地震に遭遇しても、「全体の経済性から、重要度二番手、三番手の設備は、損傷が前提となっており、それらが破損したり火災が発生しても想定内。」という考えでおりました。

ですから、中越沖地震の際の、東電柏崎の電源設備変圧器の一部火災について、「だから原発は危険」という、鬼の首を取ったような一部報道に対しても、『大騒ぎする必要はない。大事故にはつながらない。』と平氣を決め込んでおったのです。しかし、フクシマの事故で、東電の設計の甘さもさることながら、自分自身の地震に対する認識の甘さも、思い知りました。

設計手法の妥当性云々の前に、設計条件の設定の大前提に対する認識が間違っていたのです。あれでは、安全なわけがない。

東北電力の女川原発は、さすがに東電と異なり、発電所は予想津波の高さを十分に超える高台に建設し、地震で自動停止もしました。事故後の国際検査機関IAEAの査察でも、被害の少なさに驚嘆されたように、今回の地震レベルでは、問題ありませんでした。

しかし、フクシマでは、1000年に一度の規模の地震で、あの大惨事です。一万年に一度の地震なら、十万年に一度の地震なら、どうなるのでしょうか。設計条件が定められない事態です。設計で考慮できる範囲をはるかに超えています。日本列島では、推し量ることができない自然の力、それを認識すべきです。原子力行政、そして原発推進派の人たちは、どういう考えでいるのだろう。『新潟は、そして更に日本は、東電と心中せよ、と言っていると同じだ』と、思うようになりました。

ガイドで、このような話はしませんが、これは訴えたいのです。大學さんは、感覚的かも知れませんが、原子力の危険性を認識していたのです。

4. 長岡高校 第二校歌（旧制中学）の改定の話 (1) 概要の紹介記事

ふるさと長岡の人びと(長岡市1998) p:

「**へ大学へと長岡高等学校第二校歌**
昭和三十二年（癸酉）五月十五日、大學は母校
長岡高等学校に招かれ講話を行っている。そこで、
大學という名を雅号だと思ひ込み厚顔不遜な名だ
と思う人もあるようだと言きして、
「私にはどうも不似合で、迷惑な事もいろいろ
ありました。まだ小学校に入ったばかりの頃、上
級生に呼びつけられて、へお前はまだ小学校に入っ
たばかりのくせに、大學とは何事だ。こんな風に
して何回泣かされたかわかりません。三十歳を過
ぎてから小石川にささやかな標札をあげました
が、ちょうど拓殖大学の通学路にあたつて居りま
して、学生が毎日前を通るのですが、新入生なん
かは、田舎から出て来たばかりですからへおい見
ろよ、東京にはこんなちっぽけな大学があるんだ
なあ、これにくらべれば俺達の大学は立派だなあ
……」などという。腹が立つけれどもどうにも致
し方ありません。時によると地方の図書館などか
らへおたくの大学の出版物を寄贈して頂きたい」
などと言つて来ます」
と、講話の導入部で笑わせて生徒の緊張感を和
らげ、自身を語り、好む道を深めようとい説いている。
講話の後、大學の作詞になる第二校歌を全校生
徒で歌つて聞いてもらったという。再度壇上に
立った大學は「私がこの作品を作つてからもう二
十年近くなります。それでいていま初めて聞くの
です。……曲も立派ですね。ただ胸がつまつて……
有難う……。有難う……」と感激の言葉を残した
（『和同会雑誌』第九十七号による）。
詩人八木忠栄はこのとき「年生、詩人で凄いま
んだ、と私はその姿に感動した」という。
「翳すゆかりの三葉柏／淵源とほきが藩の／
高き精神を新しく……」と歌う第二校歌は、昭和十
六年（丙寅）に制定され、二十六年には歌詞の一
部が大學自身によつて改められて長岡高等学校へ
と受け継がれている（土田隆夫『柏の社』による）。
（吉岡 又司）

(2) もとの長岡高校 第二校歌

作詞・原曲 堀口大學、作曲 深井史郎

昭和十六年(1941)十月二十三日の創立70周年記念事業のひとつとして、
その七月に大學が同窓会より、第二校歌の作詞の依頼を受け、作詞。
作成後、佐藤春夫氏にも批評を乞う。字脚や字句を正したのち、作曲には若い
作曲家を、と友に相談し、大學が旧知の深井史郎氏の名があがった。
作詞の経緯は、「堀口大學全集 七 VII 身邊雜録」 p698-704 小澤書店(1983)
九月になってから「翳すゆかりの三葉柏」の言葉が浮かび、その後わずか
一か月の間に作詞・作曲がなされたわけで、おどろきである。

その歌詞は、父久萬一の書による記念資料館「額装の歌詞」にあるように、

一、
翳すゆかりの三葉柏
源淵とほきわが藩の
高き精神を新しく
ここに伝へて剛健の
校風守る一千余
北の丈夫血はたぎる

二、
鋸山はけざやかに
東の空に聳えずや
汪洋として信濃川
西の沃野を洗はずや
秀麗の気を鍾めたる
われ等濁りのあるべきや

三、
歴史かがやく長岡の
文の林に生ひたてる
若木は国の柱ぞと
誓ひ男々しく奮ひ立ち
修文鍊武日も足らぬ
われ等よ学徒報国團

四、
若きみ民に賜はりて
あやにかしこき勅語
ささげまつりていざ共に
常に戦の庭に在る
心をつねのころにて
励め励まん我が徒よ

(3) 現在の歌詞

しかし、現在の歌詞は、以下の通り。

第二校歌 昭和16年 創立70周年記念
作詞・原曲 堀口大學、作曲 深井史郎

一、
翳すゆかりの三葉柏
源淵とほきわが藩の
高き精神を新しく
ここに伝へて剛健の
校風守る一千余
北の丈夫血はたぎる

二、
鋸山はけざやかに
東の空に聳えずや
汪洋として信濃川
西の沃野を洗はずや
秀麗の気を鍾めたる
われ等濁りのあるべきや

三、
歴史かがやく長岡の
文の林に生ひたてる
若木は国の柱ぞと
誓ひ男々しく奮ひ立ち
智育体育日も足らぬ
われらよ自由民主の子

四、
若き命を誇りにて
行手はるけき日本の
平和の明日のいしずゑを
築く責務を双肩に
父祖の労苦を心にて
励め励まん我が徒よ

2016年2月12日 長岡高校記念資料館にて、和同会雑誌を見せていただき、
以下を確認した。

第二校歌は、昭和26年創立80周年に合わせて、改めた。

昭和26年復刊の 和同会雑誌96号 (創立80周年記念号)の第二校歌のページ(p196)に、
「昭和16年制定(作詞堀口大學氏、作曲深井史郎氏)のものを、
今回、原作詞者に請うて一部改訂していただいたもの」と付記し、
新しい第二校歌・歌詞を掲載している。
しかし、そのように至った経緯の詳細は、同記念館でも、不明とのこと。

その次の記録としては、しばらく和同会雑誌休刊の後、再復刊の
和同会雑誌97号にて、堀口大學氏が、昭和三十二年五月の長岡高校での
講演のときの所感を述べている。

大學という名を、誤解されたことのほか、昨夜泊まった旅館の柱が太かったこと
などを述べ、皆さんも頑張るようと、励ました。

その文末に、編集部の付記(昭和32年5月15日)がある。

母校での講演の後の全校生徒の第二校歌斉唱を聞き、
感激の言葉となったことへの、編集部の付記(昭和32年5月15日)として、

「氏の心に去来する母校への愛着と後輩への限らない信頼が、
星霜を移した感慨とともに、この言葉となったのではあるまいか。
一同、偉大なる先輩の話に直接触れる思いで、思わず頭を垂れた
のである。

今後、校歌を歌うに際し、この感動を胸に想起していきたいものである。」
と述べている。

昭和33年1月発行 和同会雑誌97号 「所感」

(4) 大學のことば

1) 堀口大學 長岡高校講話 (1957)

昭和三十二年五月に、長岡高校で講演。

講演の中で、自分の作詞した第二校歌を一度も聞いたことがないという話を
されたい。

講演が終わるとともに、生徒全員から第二校歌が歌われた。

その時、大學さんは、感激し、言葉が出なかったという。

再度壇上に立った大學は「私がこの作品を作ってからもう二十年ちかくになります。

それでいていま初めて聞くのです。曲も立派ですね。

ただ胸が詰まって・・・ありがとう・・・ありがとう」

と、感謝の言葉を残したという。

2) 母校百年の石碑の碑文 (1972)

歴史を感じさせる煉瓦造りの門柱を入れて右手に、大きな岩がある。
これは昭和四十七年に創立百年を記念して設置されたもので、
ここに大學自筆による詩「母校百年」が刻まれている。

来ては学んで巣立ちゆく
郷土の誇る俊秀を
不屈の意気に燃えつづけ
百年一日育て来た
名も長岡の高校よ
百の寿祝う学校よ
今日の目出度いこの祝賀
重ねてよ幾々度も
時空の限り

(5) 時代背景

第二校歌が作詞された昭和十六年(1941)の夏は、日米開戦の真珠湾攻撃の数カ月前である。山本五十六年譜から引用すると、以下のようである。

1927年 ジュネーブ軍縮会議
1930年 第一次ロンドン軍縮会議
1931年6月 (昭和6年) 満州事変
1933年3月 (昭和8年) 国際連盟脱退
1934(昭和9年)第二次ロンドン軍縮会議予備交渉 全権大使
1935(昭和10年) 阪之上、長岡中学で講演
和同会作成の講演録の送付原稿を手元に留め置く
1937年(昭和12年)7月7日に盧溝橋事件が勃発、日中戦争
1939年5月(昭和14年) 述志
1939年8月(昭和14年) 連合艦隊司令長官 39末 堀 殲
1941年12月8日(昭和16年) 述志
1941年12月8日(昭和16年) 同日未明 真珠湾攻撃で、
日米が開戦。
1942年6月 ミッドウェー海戦
1942年8月から11月 ガダルカナルの戦い
1943年4月18日 ブーゲンビル島上空で襲撃された

5. 参考 長岡市阪之上小学校、東中学校の校歌

堀口大學は、長岡高校第二校歌、上組小学校の校歌を作詞。

長岡町立坂之上尋常高等小学校に入学。

旧制長岡中学で同級に松岡譲。

三田文学同門の佐藤春夫とは、終生の友情。

～ 春夫詩集

松岡譲は、長岡市立東中学校の校歌を作詞。

生家は村松町・石坂の本覚寺。

「敦煌物語」は、シルクロード史の解説としても傑作。

松岡譲の娘婿が、作家、随筆家の半藤一利氏。

半藤一利氏は、『文藝春秋』編集者時代から、作家司馬遼太郎

との付き合いがあり、親交が深かった。

～ 歴史小説、歴史評論

長岡高校 第二校歌

作詞・原曲 堀口大學、作曲 深井史郎

昭和十六年(1941)十月二十三日の創立70周年記念事業のひとつとして、

その七月に大學が同窓会より、第二校歌の作詞の依頼を受け、作詞。

作成後、佐藤春夫氏にも批評を乞う。字脚や字句を正したのち、作曲には若い

作曲家を、と友に相談し、大學が旧知の深井史郎氏の名があがった。

作詞の経緯は、「堀口大學全集 七 VII 身邊雑録」p698-704 小澤書店(1983)

九月になってから「翳すゆかりの三葉柏」の言葉が浮かび、その後わずか

一か月の間に作詞・作曲がなされたわけで、おどろきである。

一、

翳すゆかりの三葉柏

源淵とほきわが藩の

高き精神を新しく

ここに伝えて剛健の

校風守る一千余

北の丈夫血はたぎる

二、

鋸山はけざやかに

東の空に聳えずや

汪洋として信濃川

西の沃野を洗はずや

秀麗の気を鍾めたる

われ等濁りのあるべきや

三、

歴史かがやく長岡の

文の林に生ひたてる

若木は国の柱ぞと

誓ひ男々しく奮ひ立ち

智育体育日も足らぬ

われらよ自由民主の子

四、

若き命を誇りにて

行手はるけき日本の

平和の明日のいしずゑを

築く責務を双肩に

父祖の労苦を心にて

励め励まん我が徒よ

多田は皇国詔勅謹解 (1942年)の著者

作詞・松岡譲、作曲・小出浩平
長岡市立東中学校

一、
川辺の桜 日に映えて
胸ふくらます若人の
蕾のいのち今ここに
立てて進まんころざし
ああ東中東中われらが母校

二、
ひがしに仰ぐ鋸山の
気高き姿ころにて
...

作詞 多田 正知、作曲 若林 孫次
長岡市立阪之上小学校 (第一)

一、
文の林に生ひたてる 長高・堀口に似てる?
若木は国の柱ぞと もとは明治時代
三葉の柏の緑そう 新潟県令の祝辞
ここ長岡の阪之上

二、
この学びやに集う子よ
文化の光身にうけて
朝な夕なに勧めかし
勇気正義の二つ道

三、
平和のしるしかかげもて
越路の原のはてしなく
愛と敬とを身にしむる
自主協同の民として

作詞 松岡 譲、作曲 今井 虎夫
長岡市立阪之上小学校 (第二)
光栄えある学びやに
におうつぼみの若木たち
みんな元気で手をとって
国の柱とのびていく
三葉柏の旗のもと

蒼紫の森の深みどり
米百俵のいしぶみに
母校のほまれたたえつつ
我らつづかん意気高く
三葉柏の旗のもと

朝日夕日に鋸山
気高き姿仰ぎみて
みがけ心の玉鏡
日々に新らし世界と共に
三葉柏の旗のもとなく

6. 佐藤春夫との友情の逸話の数々

終生の友

明治43年春に与謝野寛(鉄幹)宅で新詩社同門となってから、昭和39年5月に佐藤春夫が亡くなるまで、二人の交友は続いた。逸話のひとつが、鉄幹の形見分けの印ふたつにまつわる、晶子夫人から二人に手渡された「二顆の陶印」のはなしである。

二つ目は、長岡中学第二校歌の作詞案を、最初に感想を求めた相手が、師とも尊ぶ父親と、友人の佐藤春夫だったという話。いかに、春夫を頼りにしていたかがわかる。

三つ目は、奈良県桜井市の等彌神社の句碑にまつわる話。先に亡くなった友への想いで、もう一人の友・松岡譲の石碑にある、大學が贈った惜別の詩と同様、友情の碑に相応しい。(松岡譲の碑は、長岡の悠久山公園にある。)

「鴉山人」(あさんじん・松岡の号)と呼びかける堀口の追悼は、
 「黒尊仏の君までか/達者が自慢の君までか/
 僕より先に逝くなんて／ むごくはないか／
 松岡君／待てなかったか」



奈良県桜井市の等彌神社の句碑 等彌(とみ)

右から佐藤春夫の歌碑、左には堀口大學の歌碑。
友情の歌碑とも言われ、真ん中にその証として大學の書いた詩(手紙)。



佐藤春夫の句の建碑は没後昭和47年11月。

「大和にはみささき多し艸もみち」(佐藤春夫)(昭和47年11月4日除幕)
除幕式に友人の堀口大學が参列。

帰京後、詠まれた歌と文書を神社では横に並べて建碑された。

「さきに來て等彌のおん神をろがみし友につづきてわれもをろがむ」
(堀口大學)(平成6年11月24日除幕)

真ん中の石碑には・・・「等彌神社々頭のかの春夫兄の句碑の脇に、老生の歌碑をお建て下さるとのこと、これは願ってもない幸せ、よろこんでお受けいたします。お互いが二十才にもまだならぬ頃から、長い一生のあいだ老生をいたわり、導き続けてくれたこの友の、世にたぐいない友情と、これに慕いよる老生の心の後の世の姿として何ものがこれにまさりましょうぞ。」
(昭和48年7月21日 大學老詩生)

同じ社務所前にあるのが、

「草もみち友の声かと虫をきく」(堀口大學)(昭和49年5月5日除幕)